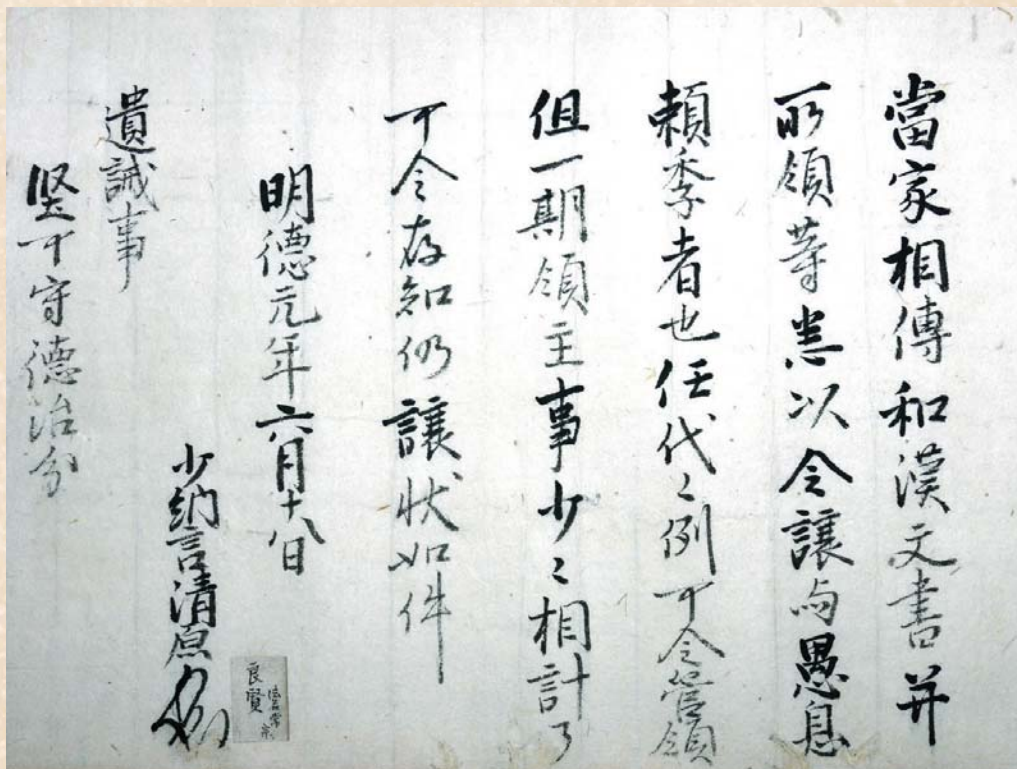


国文研ニュース

No.43
SPRING 2016



『清原家代々譲状』

目次

●メッセージ	
日本語の書物の価値	アレキサンダー・ドーリン 1
●研究ノート	
国文学研究資料館蔵『狂言絵』を読む	小林 健二 2
「高橋智先生の中国目録学講座」受業記	合山林太郎 4
日英比較出版事情	
一人間文化研究機構連携研究の成果から	渡辺 浩一 6
●トピックス	
文部科学省での特別授業	田中 大士 8
国際連携研究「日本文学のフォーラム」の成果を	
『もう一つの日本文学史』として刊行	伊藤 鉄也 9
平成28年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会通算第62回）の開催	11
平成27年度日本古典籍講習会	11
通常展示「和書のさまざま」ギャラリートーク	12
平成27年度連続講座「くずし字で読む『百人一首』」	野網摩利子 12
市民参加型イベント「古典」オーロラハンターを開催	山本 和明 13
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況	14

日本語の書物の価値

アレキサンダー・ドーリン（国文学研究資料館運営委員、国際教養大学教授）

私は1966年にモスクワ大学に入学した。その当時、ソ連はまだ典型的な鎖国状態であった。海外で出版された書籍の輸入は禁止されていて、モスクワで日本語の書籍を手に入れることのできる書店は一軒もなかった。

日本語の書籍はモスクワ市立図書館には一冊もなかった。一般学生は学者専用の中央国立図書館（国立レーニン図書館）に入ることも許されず、モスクワ大学付属東洋語大学にあった図書館を利用するしかなかった。ところが、この図書館にも教科書以外に日本語で書かれた本はわずかしき置いていなかった。さらに酷かったのは日本語の辞書が不足していたことだった。学生七人当たり古い漢字辞典と露和辞典一冊ずつという有り様で、私たちは順番に使うより他なかった。

大学卒業前、モスクワで研修を受けていた日本人が私に小さな和英の漢字辞典をプレゼントしてくれた。以来、その辞典は私の貴重な宝となり、日本古典研究を続けていくうえで、忠実な伴侶となった。その後、出会った何冊かの辞書とともに私にとってなくてはならない日本語文庫の宝物となった。

そうした辞書の多くは日本古典文学全集と並んで、20世紀初期の著名なロシア日本学の創立者の遺産といえるものであった。私は学生時代、時々その先生の自宅を訪ねたことがある。本棚には、先生が大事に収集した日本古典文学全集が並べられていた。その壮大さは奇跡のように見えた。いずれも古本屋で購入した十月革命以前の出版物であったが、カバーと表紙に漢字が印刷された書物は、当時の日本学初心者にとって、まさに美術品とでも思えるような、遠い見知らぬ世界からのメッセージに映り、特別の魅力を持っていた。

長年、手に取る機会を与えられなかったからか、日本語の書籍に対する不思議な崇拜のようなものが21世紀まで続いた。大学卒業後、ソ連科学アカデミー東洋学研究所の研究員になってからは、中央国立図書館（国立レーニン図書館）の閲覧室が開放されたが、日本語の書籍の数は依然乏しく、日本文学研究者の期待にとうてい応えられるものではなかった。館外への貸し出しも禁止され、コピーすることも許されなかった。

モスクワとサンクトペテルブルクにある東洋学研究所は19世紀半ば以来、ロシア東洋学の最高学術機関であった。それにもかかわらず、研究所内の図書館には第二次世界大戦以後、日本語の書籍が新たに加えられたことはなかった。

私は明治・大正時代の文学、とりわけ詩歌に興味を持っていたが、当時、図書館には昭和初期の古い文学全集以外は何もなく、日本の古典文化、古典文学を研究する環境には恵まれてなかった。

スターリン時代、プロレタリア文学作品は例外で、いくつかの書物が翻訳されていた。一方で古典文学の名作、とりわけ、貴族社会の洗練された美の意識や武士の生き様などを描いた小説、軍記、短歌を翻訳・出版することは固く禁じられていた。現に、日本古典文学を研究の対象とした学者の多くは逮捕され、収容所に送られてきた。

日本で長年活躍してきたロシアの最も有名な東洋学者であり、日本語、アイヌ語と琉球言語の優れた研究者でもあったニコライ・ネフスキーは帰国後、日本のスパイだったとの罪に問われ、死刑に処せられた。ネフスキーが残した膨大な原稿の一部は、天理大学図書館とサンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋学研究所に保存されている。彼が著した原稿の多くは依然として公表されていない。

「ロシア日本学の祖父」と言われるニコライ・コンラッド博士も強制労働収容所に収容された経験を持つ。博士は初めて日本古典文学をソ連の大学に紹介した。著作の大部分は出版されたが、未発表の原稿も少なからず残っている。

万葉集の研究家グルスキナ女史、平家物語の研究家ルボワ女史、江戸時代の日本原稿数百点の目録を作ったゴレグリヤド博士などロシアの優れた日本学者の多数の原稿はまだ眠っているままだ。

ネフスキーの文献は、すでに国際共同研究の対象となり日本、ロシア、西洋の専門家の中で研究のテーマになっている。ロシアのみならず、他の西洋の日本学者、とりわけ旧ソ連邦や東欧諸国の研究者による遺産も同様に、注目すべき資料であると思っている。

例えば、国文学研究資料館のデータベースにはピーター・コーニツキーが構成した「欧州所在日本古書総合目録」がある。だが、日本文化、日本古典文学の研究に生涯を捧げた学者の文献目録がいまだにない。国際日本文化研究センターには外国の日本学のデータベースがあるとはいえ、その簡単な目録にも間違いと脱漏が目立つ。

すぐれた日本文化の研究に大きな貢献した日本学者の文書は、もちろん未発表分を含めて紹介するのは不可欠である。

これら、「日本古典文学と文化の海外研究者遺産コンピュータデータベース」という電子目録は国文学研究資料館が現在進められている国際共同研究ネットワーク構築計画の一環になりうるだろう。こうしたプロジェクトを各国の日本学センターと協力して進めていく必要がある。若手研究者の力を借りれば実現できるだろう。

我々は国際化の時代に生きている。今こそ、世界に日本古典文学の魅惑と日本の美意識を紹介し、利欲を離れて日本研究に生涯を捧げた文豪の名を永く後世に伝えるべきではないだろうか。

国文学研究資料館蔵『狂言絵』を読む

小林 健二（国文学研究資料館教授）



『狂言絵』のシテが上半身裸の「仁王」

上半身裸の「仁王」の姿

近年、国文学研究資料館が新蔵した『狂言絵』60図は彩色やまと絵で狂言の舞台図を描いており、もとは屏風に貼られていたことがわかる。製作の時期は明確にはつかめないが、図様などから江戸前期と推定される。この時期の狂言絵として幾つかの作例が報告されているが、60図という曲数や他に類を見ない演目を含んでいることなど、当時の狂言の実態を知る上で貴重な資料である。そこで狂言研究に活用してもらうために、フルカラーで全図を掲げ、全体と各図の解説をほどこして、国文学研究資料館影印叢書6『狂言絵 彩色やまと絵』（平成二十六年、勉誠出版）として刊行した。

60曲の中には研究上でいろいろ面白い問題を含んだ図様があるが、一見したときから気になっていたのが「仁王」という演目である。その梗概は、く負けが続いた博奕打が国許から逃げ出すことになり仲間を訪ねると、その男は博奕打を仁王に扮装させて、天降った仏と触れまわり、信心深い人たちから供え物を騙し取ろうと持ちかける。そこで博奕打が仁王の顔付きと構えを作って待っていると、男は参詣人を連れてきて、それぞれが願をかけて布施を供える。しかし足の不自由な男が霊力で足を治そうと大草鞋を供え、仁王の体をなでまわすと顔付きが変わるので、参詣人たちは偽者と気づいて仁王をくすぐり、逃げ出した博奕打ちを追いつまむ」というものである。大蔵流・和泉流ともに江戸初期の古い台本に所収する古い曲であり、現在でも演じられている曲である。

『狂言絵』に描かれる図柄は、仁王の真似をする博奕打

を、参詣人の二人が扇でくすぐる場面である。シテの博奕打はなんと熨斗目（のしめ）を脱ぎ下げた上半身が裸の格好で、両手をグッと握り締め右手は力瘤をつくるように振り上げ、左手は大地を押さえるように下ろして、右足を鬘桶（かざらおけ）にかけて踏ん張っている様子に描かれる。体つきも筋肉質に描かれており、これも仁王像をうつしているように見える。仁王は阿吽（あうん）が一对二体で門などに安置されるが、この博奕打は口をギュッと閉じ、吽形の真似をしていることがうかがえよう。顔がしかめっ面で描かれるのも、仁王像を写しているからに違いない。

実は同じ図柄の狂言絵が国立能楽堂の『狂言尽絵巻』にも見られ、上半身裸の仁王の演じ方があることは知られていたが、『狂言尽絵巻』は江戸時代後期とされるので、この珍しい図は江戸時代の終わり頃の変った演じ方を写したものだと思っていた。しかし、江戸前期の作例が出てきたので、上半身裸になるのは古い演出であることが知られたのである。もちろん現行の舞台では熨斗目を脱ぎ下げたりはしない。

ご存じのように、寺院の門などに安置される仁王像は、上半身をはだけて阿吽の憤怒の形相を見せているから、『狂言絵』のシテの姿は仁王像の物真似としてまことに相応しいと言えよう。また、台本にも、参詣人が触って「人肌のぬくもりがする」などというセリフがあるし、裸の上半身を扇の先で突かれるのは、いかにもくすぐったそうでこの狂言の内容に適しているのである。

ところで、元禄元年（1688）に刊行された『狂言記』外五十番にも「二王」が所収されるが、その挿絵は偽仁王を

前に二人の参詣人が刀を供えて拝んでいる場面であり、偽仁王の図柄は、肩衣かたぎぬを脱いで頭巾を着けた出立で、右手を上げて左手を下げ、口を閉じ両足を踏ん張ったやはり吽形の相で描かれる。これは肩衣は脱ぎ下げるものの裸にはなっていないので、江戸前期には両用の演じ方があったことがうかがえよう。



『狂言記』外五十番「仁王」の挿絵

歌舞伎狂言の「こそぐり仁王」

江戸前期の狂言は、能と番組を一緒にするだけでなく、若衆歌舞伎や野郎歌舞伎などの初期歌舞伎に多くの演目が流れ込んだ。また、浄瑠璃の間に演じられることもあったが、その演目の中に「こそぐり仁王」という演目が見られることが、松平大和守直矩なおのりの『大和守日記』寛文七年(1667)五月二日条の記事により知られる。これは武井協三氏の「狂言の「仁王」、ゆうなんの物真似、荒事の見得」(『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』平成十二年、八木書店)という論文により知ったことである。また、武井氏によると「仁王」は舞台劇としてだけでなく、仁王像の物真似をする芸があり、それを得意とする「ゆうなん三郎兵衛」なる役者が江戸前期に活躍していたとのことである。

ゆうなん三郎兵衛は、仁王だけでなく神仏や羅漢の像を表情とポーズを変えながら次々と真似ていくのが代表芸であったようである。『大和守日記』寛文二年(1662)八月二十日の条に「きやうげんにしへ座ゆうなん三郎兵衛物まねす」とあり、その演目の中に「仁王のまね、えんまわうのまね、十六らかんのまね、其外色々なり」とあげられることから、神仏とともに仁王の物真似をしたことがわかる。

そしてこの仁王の真似がどんな芸態であったかを、貞享元年(1684)刊の井原西鶴作『好色二代男』の挿絵で具体的に知ることができる。巻七「捨ててもとゝ様の鼻筋」の挿絵に越後町扇屋という揚屋に仲間連れの客が大勢の遊

女をあげて遊ぶ様子が描かれるが、そこに「そろま七郎兵衛が仁王のまね、口ふさぎて、見る人に口あかす」とあって、その芸が描かれているのである。

そろま七郎兵衛は宇治座の道外方で、ゆうなん三郎兵衛はいにしへ座の道外方であったから、その芸は同じ系譜のものを見てよからう。武井氏はそろま七郎兵衛はゆうなんの後継者と考えている。従って、挿絵からうかがえるそろま七郎兵衛の仁王の物真似は、ゆうなん三郎兵衛と同じものであったといえよう。その姿は頭巾らしきものをかぶって、目を寄せて口をつぐんだ吽形のしかめ面をつくり、右手を手前に下げて左手を振り上げ、両足は素足で右足を斜め前に出してポーズをとっているが、注目すべきは上半身裸であることだ。ここに『狂言絵』に描かれる偽仁王との共通性が見出せるのである。



『好色二代男』巻七の挿絵

ゆうなん三郎兵衛が所属するきやうげんにしへ座は歌舞伎の一座であったと思われる。初期の歌舞伎は先行芸能から多くの要素を摂取して成長するが、小山弘志氏「固定前の狂言一主として織豊記の狂言界」(『国語と国文学』昭和二十五年)が述べるように、ことに狂言の影響は大きかった。『狂言絵 彩色やまと絵』の解説では、「六人僧」や「栗木」の図柄を通して、『狂言絵』は江戸初期のまだ狂言流派が固まらない時期の、都を中心に活動した群小猿楽を写したものであることを推測したが、この「仁王」も群小猿楽座のレパートリーの一つで、それを得意としたゆうなん三郎兵衛によって歌舞伎の世界に展開していった様相がうかがえるのである。

室町時代からの豊富な文献資料が存する能とちがって、狂言には古い資料が少ないことから、絵画資料は狂言の演出史を研究する上で貴重な資料となり得るのである。

「高橋智先生の中国目録学講座」受業記

合山 林太郎（慶應義塾大学准教授）

林望^{のぞむ}先生の書誌学講座に続き、2015年度の特任研究「日本の近世における中国漢詩文の受容 ―三体詩・古文真宝の出版を中心に―」では、慶應義塾大学ス道文庫教授である高橋智^{ともし}先生により漢籍の書誌学に関する講義が行われた。

書誌学は中国の学術用語では、文献学と言う。盛んに研究がなされ、中国の学術の世界でも高い地位を占めており、そこで蓄えられた知見は、日本文学の研究とも関連性があるはずである。しかし今日、ほとんどの日本文学研究者は、漢籍の書誌について体系的な知識を持っていない。今回の高橋先生の講義は、そのことを懸念された研究会メンバーの神作研^{かみくさ}氏のご配慮により実現したものである。前年度と同様、多くの人が参加し、熱気あふれるなか、全六回の講義が実施された。

講義では、文献学のイロハから、発展的な内容までが、先生ご自身の体験談なども交えつつ、分かりやすく解説された。以下、その内容を概括する。

まず、中国の文献学は、目録学、版本学、校勘学の三領域によって構成されていることが示され、このうち、目録学の基礎^{りゅうきよう}について、劉向^{りゅうきやう}・劉歆^{りゅうきん}父子の業績にはじまり、「史」部の独立を経て、四部分類の完成へと続く、一連の動向について解説がなされた。

版本学、すなわち、印刷史に関しては、宋版について知ることがきわめて重要であるとの指摘がなされた後、出版地域や刊行主体など、中国における印刷を考える上で基礎的な事項について解説があった。その後、元・明・清時代の出版について、『古文真宝』とも関わりのある経^{けい}版^{はん}本^{ほん}をはじめ、特徴ある書籍群について、刊行の社会的な背景とともに説明がなされた。

とくに印刷については、覆^{ふく}刻^{こく}こそは中国最大の発明であり、その見極めは慎重であるべきことが述べられた。宋版についても、後世に多くの複製が作られており、その書籍が宋版であるか否かについて鑑定を行うには、熟練を要するという。

なお、こうした印刷史についての説明とともに、莫^{ぼく}友^{ゆう}芝^しの『邵^{りやう}亭^{てい}知見伝本書目』など、清朝の版本学についての研究の伝統について言及があり、その中でも、半葉の行数と字数によって版式を整理した江^{かう}標^{ひょう}の『宋元本行格表』の、研究上の意義の大きさについてもお話があった。『和刻本漢籍分類目録』(汲古書院、1976年、増補補正版(長澤孝三編)が2006年に刊行)など、日本文学研究が日頃お世話になっている長澤規矩也^{きくよ}氏の業績にも、こうした清代の学者たちの学問の伝統は反映されているとのことである。

さらに、書籍の集散の有り様や蔵書家の歴史について説明がなされた。明清時代には、『永楽大典』や『四庫全書』などの例に見られるような皇帝による編纂事業がなされ、それが典籍の残存状況と大きく関係している。その一方で、毛^{もう}晋^{しん}や黄^{かう}丕^ひ烈^{れつ}、陸^{りく}心^{しん}源^{げん}ら明清時代の蔵書家たちが、競って宋版をは

じめとする貴重図書の蒐集・保存にあたった。誰の手を経て書物が今日伝わっているかは、その価値を決定する重要な要素であること、また、こうした蔵書家が作成した抄本や覆刻本が貴重であることについても解説がなされた。

以上のように、高橋先生のご講義は、きわめて豊富な内容を持つものであるが、とくに筆者にとってありがたかったのは、漢籍についての学問の大きな道筋を示してくださった点である。たとえば、先に触れた、中国の文献学が三つの柱によって成り立っていることや、印刷史については宋版の歴史をまず押さえるべきであり、その後の時代については、宋版のことを念頭に置きながら理解してゆけば、それほど迷わずに理解できることなど、書物を読むだけではなかなか理解しにくい、文献学の全体像、勘所について、先生は伝えてくださった。この点に、まず感謝申し上げたい。

また、中国の書誌学が持つ感覚的な部分について、丁寧に解説してくださったことも、筆者にとっては有益であった。具体的には、宋版は単に古いから価値が高いとされるわけではなく、その美しさが尊重されていることや、蔵書家の間でこの美しさがいかに大切にされたかといったことについて、様々なエピソードとともに分かりやすく解説していただいた。

このほか、本をめぐる学問の歴史は、人間くさいものであること、また、雄大な中国の風土の中で展開される書籍の集散のドラマであるということも、先生のご講義を受けて強く感じた事柄である。たとえば、現代の著名な書誌学者である顧^こ廷^{てい}龍^{りゅう}氏が、『孔^く叢^{そう}子』が宋版であるか否かについて議論が紛糾したとき、たいへんな形相で机を叩きながら、「宋^{そう}版^{はん}！」と言って、断を下した逸話など、中国の書誌学者の気迫を物語るものとして、印象深く記憶している。

筆者は、近世・近代の日本の漢文学を研究しているが、自身の研究を深めるためにも、先生のご講義は、様々な示唆を与えるものであった。具体的に述べてゆこう。たとえば、中国と日本では書誌データをとる際に注目するポイントが異なっている(たとえば、中国では、表紙や書型については、日本ほど重視しない)ことや、刊記と牌^{はい}記^きなどのように、同じ部位を、日本と中国とでは異なる名称で呼んでいることを知ることは、今後、日本人の漢詩文集をどう取り扱って行くかという問題を考える際に、役立つように思われる。

書誌の記載についても、漢籍においては、たとえば、柱刻に関して、白口(版心の上下の部分が白い)か、黒口(版心の上下の部分が黒い)かということが、漢籍の刊行の時期を判別するための、一つのポイントとなっている(宋版ではほとんど白口であるのが、時代が元、明と進むとともに、黒口へと変化してゆく)ことを踏まえて、日本の漢詩文集を見るならば、新たな発見があるかもしれない。

また、中国の文献学においては、開^{かい}化^{かし}紙^しなど、紙について

細かく分類を行うが、こうした知識をもって分析すれば、「誰でも唐紙に摺った花月新誌や白紙に摺った桂林一枝のやうな雑誌を読んで」（森鷗外『雁』）などと言われる明治初年の唐本を模した日本の書籍群について、より深く分析できるかもしれないと感じる。

このほかにも、夏目漱石『三四郎』中の「偉大なる暗闇」と広田先生のモデルとされる岩元慎^{いづもとてい}が意外な蔵書趣味の持ち主であり、現在、鹿児島大学図書館に収められている同氏の旧蔵書（岩元文庫）には、多くの刷りのよい漢籍が含まれているといったお話も、筆者の記憶に残っている。このことは、典籍についての研究という枠をこえて、文化研究へもつながるように思われる。

最後に、高橋先生のお話をお聞きし、感じたこととして、中国の文献学は、日本の書誌学と比較して、国や社会とより密

接に結びついているという印象を持ったことを記しておきたい。講義によれば、中国では、「古籍普查」の名称のもと、古典籍の評価・保護を国家事業として行っているという。具体的には、古典籍を四級に分けてランク付けし、さらに、統一された参考書を用いて、書籍を鑑定するための専門的な知識を持つ人々を養成し、図書館などに配属させているとのことである。いわば、貴重書の評価・保存・活用が、政治的な制度に組み込まれているのである。日本においても、典籍全体を網羅的に調査し、社会全体でその保存・活用を推進するための仕組みを作るべきではないか、ご講義を拝聴しながら、そのようなことも考えた。

以上に述べたようなご講義の内容の一斑は、高橋先生のご高著『書誌学のすすめ』（東方書店、2010年）からも知ることができる。ご関心のある方はぜひご参照いただきたい。



ご講義をなさる高橋先生

知識だけではなく、漢籍に携わる人々の情熱や気迫についても多くのことを教えていただいた



講義参加者

共同研究メンバーから若手の研究者まで、多くの人々が参加した

日英比較出版事情

— 人間文化研究機構連携研究の成果から —

渡辺 浩一（国文学研究資料館教授）

人間文化研究機構は、2010～2014年度に連携研究「〈人間文化資源〉の総合的研究」を実施した。当館ではそのなかの一つの研究班として「9—19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究」（代表渡辺浩一）を行った。

その成果として、臼井佐知子、H・ジャン・エルキン、岡崎敦、金炫栄、渡辺浩一編『契約と紛争の比較史科学 — 中近世における社会秩序と文書 —』（吉川弘文館、2014年12月）、Vanessa Harding, Koichi Watanabe ed. *Memory, History, and Autobiography in Early Modern Towns in East and West*, Newcastle, 2015、そして渡辺浩一、ヴァネッサ・ハーディング編『自己語りと記憶の比較都市史』（勉強出版、2015年11月）の3冊の専門書を刊行することができた。一つ目は4回の海外シンポジウムをまとめたもの、後二者は最終年度のシンポジウムを日英両言語で出版したものである。

私自身には英語図書を刊行する英語力は全くない。プロジェクト研究員の佐々井真知氏（中世ロンドン史、現在中部大学人文学部講師）の尽力により実現したことである。また、ヴァネッサ・ハーディング教授が出版社を紹介して下さったからこそ英語図書が出版できたことも記しておきたい。これらの点、冒頭ではあるが感謝申し上げたい。

この3冊の編集実務のなかで、現在の日本とイギリスでは出版契約のあり方が著しく異なることを肌で感じたところであるので、その点について簡単に紹介したい。近年の思想・文化史研究は、当該時期の出版事情の分析も不可欠とされているから、小文も研究と全く関係ないわけではない。

私の狭い経験の範囲内にすぎないので間違っているかもしれないが、日本の人文書の出版のあり方は、大手出版社ならば契約書を取り交わすけれども、中小出版社の場合、契約書は省略され、編集者と著者の人間関係で出版されるケースも珍しくはないのではないだろうか。契約書がある場合でもその長さは2頁程度のものである。したがって、内容も承諾なき同内容出版の禁止、判型・頁数・発行部数など基本的な事項に限られる。しかもそれに捺印するのはゲラが出てからということもある。

これに対して、イギリスではどうか。今回の出版社は比較的小規模な会社であるようだが、まず出版を依頼するメールを送ると、所定の申請書とアドヴァイザリー・ボー

ドで審査するから原稿の一部を送信せよという。HPを見ると確かに委員に1名だけ歴史研究者がいるので、この方が審査されたのであろう。まず、この点が日本との大きな違いである。日本では編集者が出版の可否を判断し、それから営業等他部局の承認を得て会社として出版するかどうかを決めているのではないか。所定の申請書も記載事項が多様で、例えばどのような専門家のマーケット（学会）に販路があるのかということまで書かされる。

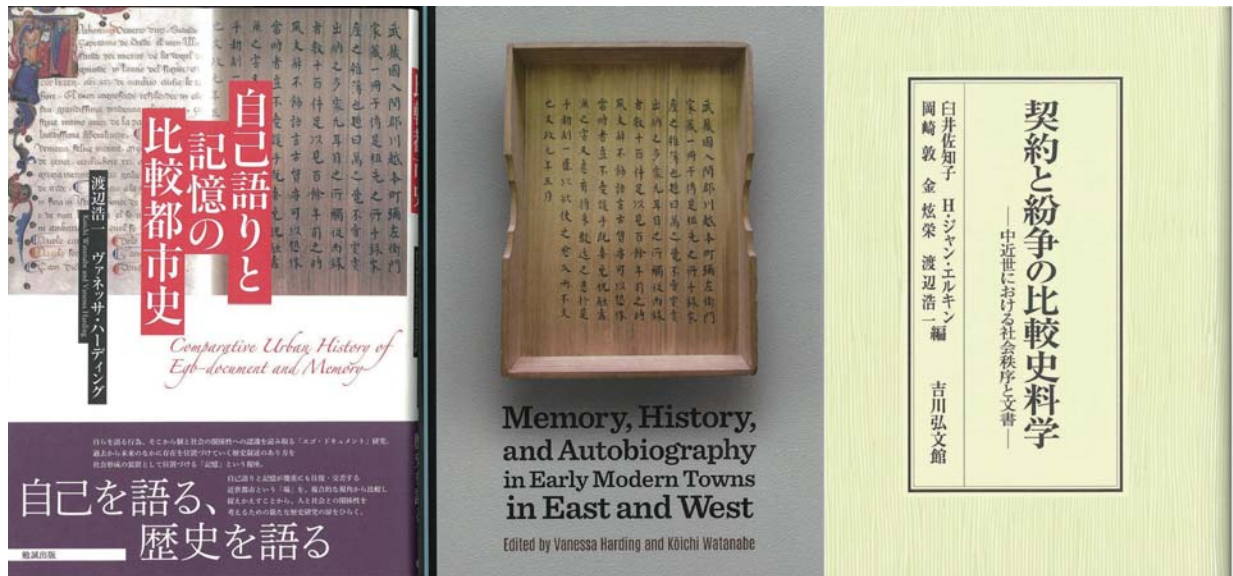
審査を通過して、いよいよ出版作業に入るのかと思いきや、今度は契約の締結である。契約書が取り交わされるまで出版作業に入ることはできないという。この契約書 Publishing agreement は、全18頁に及ぶ長大なものである。表紙には法律事務所の名前も入っている。私は2000年の在外研究の際にケンブリッジでアパートの賃貸契約を結んだことがあったので、契約書の長大さには、やはりそうかと納得した。

しかし、その内容の細かさや厳しさには驚いた。例えば、ゲラが出て8週間以内に校正して返却しなければ契約破棄という条項がある。9週間以上ゲラを抱え込んだ経験のある方は私だけではないだろう。

また、通信が届いたとされる時間の規定もある。国際郵便の場合は5営業日、ファクシミリの場合は12時間であるという。どうみても著者が欧州か北米にいる前提の規定である。この点はさすがに、1万キロ以上離れていて時差もあること、また祝日の違いも主張して緩和してもらった。

さらに、最大の問題は、同内容の図書はいかなる言語でも別途出版できないという条項が存在したことである。これは著作権の保護条項であり、恐らくは中近世ロンドンの Stationary Company という出版業者ギルドの伝統を背景としているのであろうか。そんな比較史的な興味を覚えている場合ではない。この条項に同意してしまうと、日本語で出版することが不可能になってしまうので譲れない点である。これも、日本の日本史研究者はほとんど英語を読むことができない事情を説明し、同内容の日本語図書が出版されてもマーケットは狭くならないと主張して、「日本語を除く」という一句を挿入してもらった。

なお、この出版契約書はこの出版社でどの著者に対しても共通の内容を持つものであるようで、これ自体にはサ



インをしない。編者がサインするのは、契約書に付帯する Schedule という文書である。出版契約に疎い私にはどのように日本語訳すればよいかわからない。Schedule には、原稿を受け取ってから6週間以内に出版する、編者は本を4冊受け取ることができる、印税の規定など、著者によって変わってくる事項が書いてある。日本の出版契約書はどちらかというとこの Schedule に該当するもののようにも感じる。

出版作業が開始されるにはもう一つ必要な書類があった。それは執筆者全員の同意書 Contributor agreement である。これは編者である私の手元に集めるものであり、届いたらスキャンしイギリスの出版社に電子化して送信した。本契約と別に執筆者同意書が必要という点は、日本でも行われているかどうかよくわからない。私が一執筆者として契約した時は編者の契約が別にあったのかもしれない。

ここまでの話は「契約の比較」という一冊目の本のテーマと通底する内容となっていることに読者は既にお気づきであろう。そのほか、英文原稿整備の段階で感じたことも記しておきたい。

英語出版に供する原稿には、詳細かつ膨大な約束ごとがあり、それをシカゴ・スタイルという。そのためのマ

ニユアル本 *The Chicago Manual of Style, 16th Edition*, Chicago, 2010 も出版されている。1026 ページもある大部な本である。注記の形式、数値の表記など微細な部分まで全て書いてある。なお、この日本語訳としてケイト・L・トゥラビアン著、沼口隆・沼口好雄訳『シカゴ・スタイル—研究論文執筆マニュアル』（慶応義塾大学出版会、2012年）まで出版されている点は、日本の翻訳文化の凄まじさを物語る。もっとも日本語訳は原著16版と全く同一ではなく、前半は論文の書き方マニュアルになっている。話を元に戻せば、前述の佐々井元研究員はそれを既に持っており、イギリスの出版社の HP にある注意書にもシカゴ・スタイルにせよとあったので、原稿整備はいかにシカゴ・スタイルに適合していくかという点が問題であった。

日本にシカゴ・スタイルのような広く共有されている図書はないように思われる。縦書きの数字表記一つとっても「三〇」と「三十」のどちらもよく、出版社あるいは一つの図書のなかで統一されていればよいことになっている。標準化というのは業務効率性を追求する発想であり、日本の人文学の伝統には馴染まないのであろうか。あるいは英語が表意文字のみで表記することからくるマニュアルの必然性もあるのかもしれない。

文部科学省での特別授業

当館では、大規模学術フロンティア事業の一つとして、平成26年度より「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」がスタートしています。日本の古い書物を30万点集め、すべてを画像化して、公開し、様々な検索機能をつけることによって国内外で広く研究その他に使用していただくことを目指した壮大な計画です。このプロジェクトをよりよく知っていただくために、平成27年8月から11月まで文部科学省の情報ひろばにおいて、文部科学省との共同企画広報として展示を行いました。展示の目玉の一つは、人気アニメ「NARUTO —ナルト—」が江戸時代の合巻本『じらいやこうけつものがたり児雷也豪傑譚』と深くつながっていることを解説したパネルでした。古い書物を広く知っていただくためには、若い方々にも興味を持っていただくことが重要だと考え、このプロジェクトでは、小中高生への古典教育に力を入れているからです。現在、学習指導要領でも、小学校の低学年から古典に親しむように定められており、私も、その趣旨に賛同し、ことに小学生への古典教育を重視しています。また、この展示の一環として、情報ひろばのラウンジで、小学生向けの特別授業も行いました。

特別授業は2回。第1回は、11月5日、八王子市立みなみ野君田小学校の6年生をお迎えして、当館の山下則子教授が担当致しました。話題は、展示した「NARUTO —ナルト—」の話でした。山下教授は、赤い装束のくのいち姿で登場、会場をどよめかせました。主人公のナルトにひげが生えていることなどから、九尾の狐が背景にあることを説明し、九尾の狐の歴史まで丁寧に解説。その上で、児雷也豪傑譚との関係も画像を豊富に使ってわかりやすく話しました。よく知られたアニメが古典としっかりつながっていたことに皆さん驚き顔でした。最後は、ナルトの蛇、蛙、ナメクジの三すくみにちなんで、昔のじゃんけんであるむしけん虫拳を隣同士で行い、賑やかに終了しました。

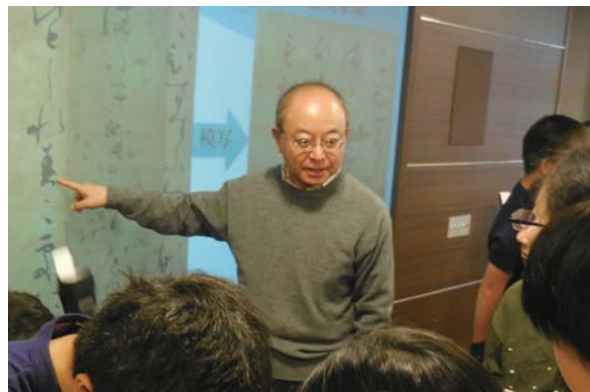
第2回は、12月11日。新宿区立愛日小学校の6年生に皆さんにお出でいただきました。講師は入口敦志准教授。まず、今年は何年？という十二支を話題にし、十二支が、時刻、方角などさまざまな分野で使われていることを解説。「うしとら」（北東）は、鬼門であると言われていること、だから、おに鬼は、牛の角を持ち、虎のパンツをはいている!?との説を披露。十二支が我々の生活に意外に深く関わっていることを気づかせました。次には、『平家物語』の二種類の伝本を並べ、同じ作品でも、本の大きさ、字が平仮名か片仮名かなど外形的な要素で本の意味が違ってくことを解説しました。また、難解なくずし字にも挑戦。ところが、内容が百人一首だったことから、皆さんたちどころに読んでしまい、びっくり。最後は、木簡、もつなん卷子本（巻物）などの古い本の複製本を前に並べて解説を行いました。見たこともないさまざまな本の形に興味津々でした。

皆さん、はじめての文部科学省ということもあって、はじめは緊張気味でしたが、だんだん古典の世界にどっぷりつかって、実に楽しそうにひとときを過ごしていました。

（田中 大士 / 日本女子大学教授）



山下 則子 教授



入口 敦志 准教授

国際連携研究「日本文学のフォルム」の成果を『もう一つの日本文学史』として刊行

『もう一つの日本文学史』（国文学研究資料館編、勉誠出版、2016年3月刊、¥2,800+税）は、平成24年度の準備期間を置いて、平成25年度から3年計画で取り組んだ国文学研究資料館のプロジェクト「国際連携研究 日本文学のフォルム」の成果を刊行したものです。新たな研究への一石となることでしょう。



本書では、これまでにあまり正面から取り上げられることのなかったテーマを扱っています。実にさまざまな研究対象とその研究成果が、ここにはふんだんに盛り込まれているのです。ただし、一見ばらばらのように見えて、実はその切り口の多彩さや、その成果の影響にははかり知れないものがあります。まさに、日本文学の多面的な姿が切り取られ、盛り付けられていることが伝わる内容となっているのです。これまでとは異なる視点で、日本文学を見据えた各論稿から、知的刺激と快感を感じていただけたら幸いです。

こうした文学史が描いた背景には、日本文学の国際的な共同研究を促進しようとする国文学研究資料館の先導的な意図があります。魅力的なテーマを設定し、毎回数人の海外からの研究者を招き、研究発表及びシンポジウムを実施したのです。海外における日本文学研究の実態を踏まえた共同研究を深めつつ、日本の研究者との濃密なディスカッションを展開する中で、日本文学が持つフォルムを多方面から複眼的に解明して

きた経緯が、この土台にはあるのです。

本プロジェクトを展開する中で、併行して国文学研究資料館で小展示も開催しました。展示室における小展示とリンクさせて、テーマにふさわしい館蔵の絵画資料等を、小規模ながらも実施するように配慮したのです。実感実証の学問への手掛かりを求めているものであり、その成果は本書に収録した図版等を通して、論稿の各所にも活かされています。

以下、本書の構成を部立てと目次を追うことで通覧しておきましょう。これまでの日本文学という枠組みでは取り上げられることの少なかった、刮目に値するテーマが居並んでいます。多角的な視点から多彩な切り口で論じたもの、と言うだけに留まらないそのスケールの大きさを、ここから読み取っていただきたいと思います。

序文／伊藤 鉄也

第一部 もう一つの室町 ― 女・語り・占い

〈長らく「文化不毛」と評されてきたこの時代は、研究の飛躍的な進展により、豊饒な広がりをもつことが明らかになってきた。女・語り・占いというキーワードから、皮膜に覆われていた室町の庶民文化像を炙り出す。〉

〔イントロダクション／小林 健二〕

- ・「占や算」―中世末期の占いから見る専門知識の庶民化／マティアス・ハイエク
コラム◎室町時代の和歌占い ―謡曲・お伽草子・歌占本／平野 多恵
- ・物語草子と尼僧 ―もう一つの熊野の物語をめぐる／恋田 知子
- ・性・語り・救済と中世のコスモロジー ―東西の視点から／ハルオ・シラネ（翻訳：北村 結花）
コラム◎江戸時代の絵画に描かれた加藤清正の虎狩／崔 京国

第二部 男たちの性愛 ― 春本と春画と

〈「性」をめぐる問題は、長らく文学史から忌避されてきた。人間存在の根源的なテーマであるにもかかわらず……社会・思想・文化が交差する結節点として「性」の問題を捉えかえし、江戸期のジェンダーの多様性、春画・春本の歴史的・文化的位置を提示する。〉

[イントロダクション / 神作 研一]

- ・若衆—もう一つのジェンダー / ジョシュア・モストウ
- ・西鶴晩年の好色物における「男」の姿と語りにおける機能 / ダニエル・ストリューヴ
- ・その後の「世之介」—好色本・春本のセクシュアリティと趣向 / 中嶋 隆
- コラム◎西鶴が『男色大鑑』に登場するのはなぜか / 畑中 千晶
- ・春画の可能性と江戸時代のイエ意識 / 染谷 智幸
- ・艶本・春画の享受者たち / 石上 阿希
- ・春画における男色の描写 / アンドリュー・ガーストル
- コラム◎欲望のあがちな矛盾—男が詠う春本の女歌 / 小林 ふみ子

第三部 時間を翻訳する—言語交通と近代

〈「時(とき)」という概念がいかにして文学のなかに描かれるようになったのか。人の紡ぐ物語にその不在がないように、このテーマのみでも文学史を描くべき題材であろう。コトバと時間にまつわる様々な諸相から、人が「時」をどのように操ってきたのか、その歴史の断片をかいま見る。〉

[イントロダクション / 野網 摩利子]

- ・梶井基次郎文学におけるモノの歴史 / スティーブン・ドッド (翻訳: 村山 和裕)
- ・テキストの中の時計—「クリスマス・キャロル」の翻訳をめぐる / 谷川 恵一
- ・近代中国の誤読した「明治」と不在の「江戸」—漢字圏の二つの言文一致運動との関連 / 林 少陽
- ・漢字に時間をよみこむこと—敗戦直後の漢字廃止論をめぐる / 安田 敏朗
- ・「時」の聖俗—「き」と「けり」と / 今西 祐一郎

コラム◎日本文学翻訳者グレン・ショーと「現代日本文学」の認識 / 河野 至恩

コラム◎『雪国』の白い闇 / 山本 史郎

三年間のおぼえがき—編集後記にかえて / 谷川 ゆき

一本の筋を通した文学史としては、なかなかまとまりそうにないテーマを扱っています。一見、三題噺のようにも見えるかもしれませんが、しかし、通読すると、まさに〈もう一つの日本文学史〉が見えてくる仕掛けとなっているのです。

各部の冒頭に置いた[イントロダクション]では、それぞれの部の責任者である小林健二、神作研一、野網摩利子の三氏が、収載論稿の解説をわかりやすくまとめ、本書の読者へのよき道しるべとなっています。問題意識のありようと、それにどのように対処しようとしているのかを、簡潔明瞭に照らし出す役割を担っているものです。

まずは、この[イントロダクション]からお目通しいただきたいと思います。

〈もう一つ〉の視点から日本文学を見通すと、これから我々が語り合うべき話題がこんなにも満載なのです。それを、コラムも下支えしていて、興味深い構成になっているはずです。

本書は、こうした多年の幅広い成果をもとにして編集し刊行したものです。海外を含めて多くの研究者及び文学を愛する読者の方々と一緒に、日本文学研究に関する新鮮な情報の共有を図ることが期待できる一書として、ぜひとも手に取って通読いただきたいと願っています。

(伊藤 鉄也)

平成 28 年度アーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会通算第 62 回）の開催

1. 趣 旨

国文学研究資料館では、アーカイブズ（記録史料）の収集・整理・保存・利用等に関する最新の専門的知識、及び技能の普及を目的として、アーカイブズ・カレッジを開催しています。

2. 期 間

- A. 長期コース（東京会場） 国文学研究資料館
前期＝平成28年7月19日（火）～平成28年8月5日（金）
後期＝平成28年8月22日（月）～平成28年9月9日（金）
- B. 短期コース（高知会場） 高知県立大学永国寺キャンパス
高知市立自由民権記念館
平成28年11月14日（月）～平成28年11月19日（土）

3. 申込資格

次のいずれかに該当する者。

- (1) 大学院在学中または大学卒業以上の学歴を有する者で、アーカイブズ学に強い関心を持つ者。
- (2) 文書館などの歴史資料保存利用機関をはじめとして、官公署・大学・企業等の文書担当部局及び歴史編纂部局、またはアーカイブズを取り扱う必要のあるその他の組織に勤務し、アーカイブズの収集・整理・保存・利用等の業務に従事している者。

4. 受講料

無料。ただし、横浜開港資料館の観覧料（200円程度）は受講者の負担となります。

5. その他

申込書及び詳しい情報等については当館 Web ページ (<http://www.nijl.ac.jp>) をご覧いただくか、管理部 総務課企画広報係（TEL 050-5533-2910）までご連絡ください。



実習の様子

平成 27 年度日本古典籍講習会

平成28年1月26日（火）～29日（金）に国立国会図書館と国文学研究資料館の共催で平成27年度日本古典籍講習会を開催しました。

本講習会は、日本古典籍の整理・目録化の促進及び環境の整備のため、古典籍取り扱い経験年数おおむね3年以内の職員を対象に、平成15年度より年1回、開催しております。

古典籍を取り扱う業務というと、古典籍の知識や技術に長けている専門家が行うイメージがあるかもしれませんが、しかし、受講者からは、ベテランの職員の退職等による人材不足のため、知識も経験もないまま古典籍を取り扱わなければならない事態になったという声も多く聞きます。

本講習会は、初心者でも、実際に業務を行う上で必要となる基礎的な知識や技術を包括的かつ効果的に学習ができるよう、受講者が実際に古典籍に触れる、目録を作成する等の実習を組み込み、工夫を凝らしたプログラムとなっています。

受講者からも、「基礎からしっかり体系的に学べたことがよかった。」「和古書や資料の修復について、実物を見ながら講義が受けられた。」、また、テキストについても「予習復習に大変便利で、理解しやすい。」との声をいただき、大変好評を得ています。



「蔵書印の見方・読み方ー書物の伝来」講義風景



「国文学研究資料館和古書目録の作成」実習風景

通常展示「和書のさまざま」ギャラリートーク

「和書」というと、和紙を糸で綴じた本を思い浮かべる方が多いかもしれません。「和書」とは主に江戸時代までに日本で作られた書物を指しますが、一言に「和書」といっても、時代や作る人の身分によって形態も紙質も様々なものがあります。ギャラリートークでは、和書の広大な世界の基礎知識が得られるのみならず、さらに奥深い世界を垣間見ることができます。既に行われた4回のギャラリートークでは、参加者の方は興味津々に熱心に耳を傾けている様子でした。この機会にぜひ展示室に足をお運びいただき、奥深い和書の世界を一緒に楽しみませんか。

ギャラリートーク日程・講師

・平成28年1月27日(水)14時30分～15時15分	落合 博志 教授
・平成28年2月19日(金)14時30分～15時15分	入口 敦志 准教授
・平成28年3月16日(水)11時30分～12時15分	恋田 知子 助教
・平成28年4月20日(水)11時30分～12時15分	小林 健二 教授
・平成28年5月25日(水)11時30分～12時15分	相田 満 准教授

※展示期間 平成27年12月7日(月)～平成28年6月4日(土)

平成28年度より、土曜日も開室しています。

休室日 日曜日・祝日、展示室整備日

開室時間 10時～16時30分 ※入場は16時まで



ギャラリートークの様子
恋田 知子 助教

平成27年度連続講座「くずし字で読む『百人一首』」

恒例のくずし字を学ぶ講座を平成27年5月から平成28年2月まで全9回にわたり、開催しました。平成27年度は各回異なる講師が当館蔵の『^{よしまひやくにんいっしゅうあずまより}錦百人一首あつま織』より数首ずつ、歌の解釈を施しながら、くずし字の解説を行いました。

第1回	田中 大士	天智天皇、持統天皇、柿本人麿、山辺赤人
第2回	山下 則子	天智天皇、中納言家持、喜撰法師、小野小町、中納言兼輔、藤原興風、文屋朝康、右近
第3回	海野 圭介	猿丸大夫、安倍仲磨、蝉丸、参議篁
第4回	小山 順子	僧正遍昭、陽成院、河原左大臣、光孝天皇
第5回	寺島 恒世	中納言行平、在原業平朝臣、藤原敏行朝臣、伊勢
第6回	齋藤真麻理	元良親王、素性法師、文屋康秀、大江千里
第7回	神作 研一	三條右大臣、貞信公、源宗于朝臣、右近
第8回	恋田 知子	凡河内躬恒、壬生忠岑、坂上是則、春道列樹
第9回	今西祐一郎	菅家

毎回創意工夫に富む講義で、定家自筆本をはじめとする写本、版本の紹介、御伽草子、屏風絵、浮世絵などへの展開、百人一首成立過程論や歌の新解釈に至るまで、研究としても高度な内容が披露されました。

用いたテキストはつぎのとおりです。上記歌人名はこの表記に従いました。

平成28年度は、同じく『百人一首』から昨年度と異なる歌を読み解く予定です。

(野網 摩利子)

テキスト：『錦百人一首あつま織』安永4(1775)年、^{かりがねや}鴈金屋刊。後修。1冊。絵入本。和古書請求記号タ2-213。



第9回講座風景 講師：今西館長

市民参加型イベント「古典」オーロラハンターを開催

さる3月13日(日)、当館2階大会議室にて、国立極地研究所、総合研究大学院大学との共同ワークショップ「古典籍からオーロラを見つけよう「古典」オーロラハンター」が開催されました。このワークショップは総研大・学融合共同研究に採択された研究課題「オーロラと人間社会の過去・現在・未来」(通称:オーロラ4D プロジェクト、代表:片岡龍峰 極地研 准教授)のメンバーで企画し、3機関が主催したものです。プロジェクトは総勢13名。当館からは総研大院生を含め4名が加わっています。

「オーロラに思いをはせるのは研究者だけじゃない」というキャッチコピーをオーロラ4D プロジェクトでは掲げています(<http://aurora4d.jp/>)。先人たちは古代からオーロラなどの天の異変を観察し、記録として残してきました。いまは、多くの人々がデジタルカメラで撮影したオーロラ写真をSNSに投稿しています。そうした様々な記録を集積し、解析することで、オーロラをはじめとする天体現象の解明につながるのではないかと、そう考えるのです。3Dとはいわば立体空間のことですが、そこに時間軸を加えて考える発想でした(だから4Dなのです)。人文科学系と自然科学系という異分野の研究者同士が連携しあうと同時に、旅先などで撮影したオーロラ画像の投稿を呼びかけるなど、市民の皆さんを宇宙環境モニターとして引き込んでいき、先端科学と市民との新たな関係性を構築することを目標としています。

今回のワークショップは、将にそうした取り組みで、古代・中世を中心にした古典籍・古記録の活字本のなかから、オーロラに関する記述一たとえば「赤気」「白気」「赤雲」「白虹」といった言葉を、皆さんに協力してもらい一緒になって探したそうというものでした。募集期間も短く、定員数を満たすのか不安な点もありましたが、最終的には定員の倍以上の応募となりました。市民の皆さんのサポートには、メンバーをはじめ、歴史学の研究者の応援なども得て、各テーブルに分かれ質問などに応えることにしました。

ワークショップは二部構成からなります。まず当館山本から、皆さんへの歓迎の挨拶と人はなぜ天候現象を記録に残すのかという話題について話し、片岡先生からは、オーロラの映像解説のあと、プロジェクトの説明、太陽風・地磁気・大気がオーロラに重要であることなどをわかりやすく紹介いただきました。京都大学院生の早川尚志さんにも「東アジアの歴史書に眠るオーロラ」と題して話をしてもらい、積極的に若手研究者にも活躍してもらいました。

会場の一角に展示コーナーを設け、『天文図解』『訓蒙天地弁』など4点を展示。極地研からは、3D オーロラが鑑賞できるヘッドマウントディスプレイを用意いただきました。これまで自然科学系の古典籍について目に触れる機会が少ないためか、正確な星座の記録された図(衆星図)などに驚かれる方もおられ、休憩時間は多くの参加者がそれぞれの展示を楽しんでいたようです。

後半は、これからおこなう作業解説を経て、およそ1時間におよぶ点検、すなわち古典籍の活字本から言葉を拾い出す作業を、黙々と参加者の皆さんはこなしてくださいました。1枚のカードに資料の記載ページや用例を書き出していくのですが、書き上げられたカードは数十枚におよび、貴重なデータを収集することができました。幸いなことに、この取組のなかから新たなオーロラの用例を参加者の手により見いだすことができたのです。従来の研究では全く触れられてこなかったもので、プロジェクトメンバーも興奮冷めやらぬ様子でした。検討を加え、この成果をしかるべき「場」=学会等にて公表していくことになりそうです。

スタッフを含めると総勢53名もの人が一つのことに取り組むというこのイベントも大変好評のうちに終えることが出来、こうした企画の可能性が広がったように思います。ご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

(山本 和明)



総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成27年度第2回特別講義を開催

平成28年1月7日(木)に、平成27年度第2回特別講義を開催しました。多くの参加者があり、興味深い内容に、会場から多数の質問が出されていました。

講義題目と講師は次のとおりです。

「春日懷紙の書誌学」

(田中 大士 教授)

「『近世職人尽絵詞』の注釈を終えて」

(大高 洋司 教授)



田中 大士 教授



大高 洋司 教授

○平成27年度学位授与

平成27年度の学位(博士号)が以下のとおり授与されました。

「『徒然草』の漢籍受容と漢訳・継承」

黄 昱(課程博士)



○『韓半島とユーラシア東海岸の五〇〇年史』について

金 時徳(ソウル大学奎章閣韓国学研究院 助教授／平成21(2009)年度修了生)

この度、拙著『韓半島とユーラシア東海岸の五〇〇年史』(メディチメディア社〈韓国ソウル〉、2015)が、韓国の2015年度世宗図書・教養部門に選ばれた。この事業は韓国の文化体育観光部が毎年1200種の図書を選定し、種毎に1000万ウォン(96万円程度)分を仕入れ、韓国国内の図書館や海外の韓国関係機関に配布するものである。拙著はまだ日本語訳されていないが、茨城キリスト教大学の染谷智幸教授による書評が『リポート笠間』59号に載っているので、詳しい内容はこちらをご参照いただきたい。

拙著は韓国最大の日刊紙『朝鮮日報』の系列誌である『週刊朝鮮』に、2014年に1年間連載したコラムを集めたものである。紙面の性格上、筆者が研究を続けるなかで見えてきた設計図を、韓国社会に紹介する内容となった。拙著を通して韓国の市民に伝えなかったのは、①歴史を長いスパンで眺めること、②歴史をいわゆる「歴史学」的な方法でのみ見るのではなく、経済・文化など様々な面から捉えること、③ユーラシア大陸の東海岸という空間のなかに置かれた地域としての「韓半島」の歴史を眺めること、④中国中心の世界観からの脱却の試み、の4点である。

この本は私自身の予想に反して韓国社会で好意的に受け入れられた。それは、激変する東部ユーラシアの情勢が、日本以上に島国的な性格の強い「韓国」の市民をも刺激し始めたことを意味することだと、私は解釈している。元となったコラムを連載した後、私は更に『朝鮮日報』『中央日報』などの韓国日刊紙にコラムを書くようになったが、このような時にこそ本領に戻るべしと思い、今年1年は、2010年に刊行した『異国征伐戦記の世界—韓半島・琉球列島・蝦夷地』(笠間書院)の続編『壬辰戦争の系譜学』(仮)を執筆することになっている。『異国征伐戦記の世界』の韓国語訳は、今年の上半期に出版される。この続編も、いずれ日本語訳されることだろう。是非ご高覧いただき、ご教示下されば幸甚に存じます。



5月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

6月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

7月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

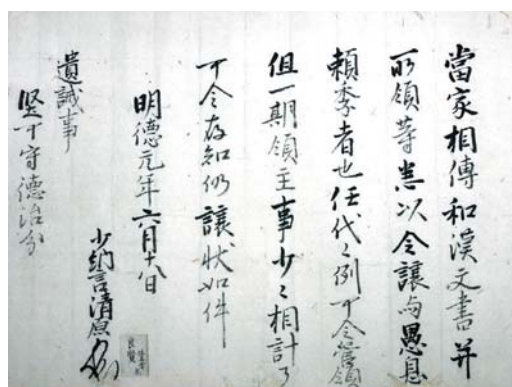
- 開館：9：30～18：00 ● 請求受付：9：30～12：00, 13：00～17：00 ● 複写受付：9：30～16：00
 ただし、土曜開館日は、
 ● 開館：9：30～17：00 ● 請求受付：9：30～12：00, 13：00～16：00 ● 複写受付：9：30～16：00

表紙絵資料紹介

『清原家代々譲状』（当館寄託 重要文化財）

重要文化財『清原良枝遺誡・清原家代々譲状』（卷子2巻）のうち、今回表紙に利用したのは南北朝時代から室町時代にかけて活躍した儒者・清原良賢の譲状である。『清原家代々譲状』は鎌倉時代から室町時代の清原氏当主が後継者に財産を相続させるために作成した文書で、12通が重要文化財に指定されている。この文書に記されているように、清原良賢が息子・頼季へ明德元年（1390）6月18日に譲状を認めていたようだ。なお、明德元年とは、南北朝合一の直前であり、まだ列島各地で戦争が繰り返されていた時代である。

譲状の冒頭に記されているが、儒者の家らしく相続の対象は「当家相伝和漢文書」と所領である点は興味深い。清原氏は天武天皇の皇子・舍人親王にはじまる朝廷官人の家柄で、代々天皇・将軍に対する儒学講義を行ったことで著名であり、清原良賢は其中でも中世の思想史研究には欠くことのできない人物である。『枕草子』の作者である清少納言は清原氏の一族であることからその名が付けられた。朝廷の儒者として活躍していた清原氏は江戸時代に至って、堂上公家（宮中の清涼殿に上がることのできる貴族）のひとつとして「舟橋」の家号を称し、分家として伏原・澤両家が成立した。今回の『清原良枝遺誡・清原家代々譲状』は2015年に他の舟橋家文書とともに舟橋家御当主より当館が寄託を受けた歴史資料のひとつである。現在、寄託された舟橋家文書は保存処置を進め、利活用できるよう目録作成を行っている。（西村 慎太郎）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

発行日 平成28年（2016）5月6日
 編集 国文学研究資料館広報出版部
 印刷所 睦美マイクロ株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館